

年間第18主日

福音朗読 ルカ 12・13-21

2022.7.31

カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日は7月の最後の日ですね。31日になりました。真夏なんですね。この暑い中で、このようにして皆さんこの教会に集まって一緒にごミサを捧げることができるということを、まずは恵みとして感謝したいし、また、ここに集っているお互い同士にも感謝したいと思います。

夏になれば毎年テレビでも熱中症に気を付けてくださいと言われて、水分補給してください、と言われてますよね。そして、喉が渴いたなと思うようになってから飲むんではもう遅いんですよ、と。だけど、お医者さんも注意するのは、水分のように見えるけども水分じゃないものもありますから、それで水分をとった気にならないでください、と。アルコールですよ。水分のように見えるけども、よけい渴いちゃう。

なんでこんな話をしているかということ、別に体調のことを注意する場所じゃないんだけど、聖書の中で、今日も最後、「お前の命は取り上げられる」、「命」と出て来た。新約聖書は古代のギリシア語で書かれていますけど、でもイエス様や聖書を書いた人たちの考えはヘブライ語で、旧約聖書はヘブライ語で書かれていますね、考え方はヘブライ語で考えてたと思われます。わたしたちもそれぞれ英語を使うかもしれないけど、自分で考えているのは、すごいバイリンガルになれば違うけども、日本語で考えてそれを英語にしている。そんなようなことらしいんですね、新約聖書のギリシア語というのは。だから、考えている背景にはヘブライ語の思想があって、ヘブライ語で「命」というのは「ネフェシュ」って言うんです。「魂」とも訳されますけど、ネフェシュというのは、本来の意味は人間の喉を表わしているんだそうです。旧約聖書の人たちは抽象的な概念を具体的な目に見えるものに置き換えて表現している。だから、人間存在全体を表わすのを「喉、ネフェシュ」ということばで表していたということなんです。

今日も、すごい豊作でこれから先安心だと思っている金持ちのたとえ話が出

て来ましたが、この人も「こう自分に言ってやるのだ。『さあ、これから先何年も生きて行くだけの蓄えができたぞ』」って日本語では訳されてますけど、「こう自分の命に言ってやるのだ。『わたしの命よ、これから何年も生きて行くだけの・・・』」って、直訳すればそういうふうなことらしいです。

話は戻りますけども、なぜ人間の命や人間存在のことをネフェシュ、喉って表わしたかって言うと、わたしたちがこういう暑い日に喉が渴くように、渴いている。何かを自分の中に取り込まなければ苦しくてしょうがない。満足できない。そういうような状態を見ているらしいです。もちろん水分じゃないんだけど、わたしたちが暑い日に喉が渴いているように、わたしたちの魂もあるいは命もずっと何かを欲している。それを取りたい、取りたいと思いつけているということですよね。でも水分と同じように、本来自分の魂を潤してくれるものでないものを、自分の魂の渴きを癒してくれるものかのように錯覚して取り続けるというようなひとつの状態がありますよ、というのが今日の聖書のお話かなという感じがします。

でも、だからと言って、「あなたの魂の、ネフェシュの渴きを癒してくれるものはこれです」っていうふうに外から教えてもらうことはできないんですよ。なぜかと言えば、わたしたちが一番魂として渴いちゃう状態というのは、自分は納得していないのに外部から強制される、自分の自由を尊重されないっていう状態が、一番魂を渴かせるから。自分の中で出会って行き、そして納得して受け取って行くということ以外にない。だから、それぞれ、今自分にとって自分の存在を満たしてくれるって思うこと、それを通して本当の意味での命の糧へとイエス様ご自身が導いてくれるという希望を持ち続けながら、自分を大切にして行くということなんじゃないかと思います。

ただし、わたしたちがこのように毎週毎週集まってごミサを捧げている中にひとつの考え方のヒントがありますよ、っていうのがまた教会の大切にしてきたことでもあります。「イエス様はご自分の十字架の死を通して死に打ち勝ち、そして永遠の命、復活の命に入られました。そのご自分の命をわたしたちにも分けてくださるんです」というのが、ミサを通していつも思い起こしていることですよね。イエス様は「わたしはこのように十字架の死と復活を通して永遠の命に入りました。皆さんも同じように、各自永遠の命を獲得してください」って言うんじゃないんです。イエス様がご自分の死と復活を通して、死に打ち勝たれた命をわたしたちにも無償で分けてくださいます。そういうイエス様か

ら命を分けていただいて、わたしたちは生きている。その者同士、お互いに神様から頂いたなと思いうろんな恵みを分かち合うというところに、本来の命の渇きを癒すヒントがあるのではないですかね、ということを通しを思ひ起こすし、また表現している。それが教会なんじゃないかなと思います。

この世界の全ての人が、それぞれの中で本当にみんな一所懸命一人ひとり生きている、自分の魂の渇きをなんとか癒そうとしている者同士、わたしたちが神様の恵みのうちに本当の意味でのそれぞれの人間存在を生かす、渇きを癒す、そういう道に出会い、受け取って行く。そのために神様はいくらでも恵みを与えてくださるんだ。あるいはヒントを与えてくださるんだ。そのヒントは時には苦しいことかもしれません。でもその信頼のうちにわたしたちがそれぞれの命を支える、そしてお互いに支え合う者とされるように、このごミサを通してイエスご自身の思いをもう一度出会い直す機会としたいですね。そのための恵みを頂きたいと思います。